

本物を提供する寿司屋さん

シリーズ～まちの中の達人～



本町通り商店会にある池袋都寿司をお訪ねしました。

店主の富岡さんがこの地に開店したのは21年前。寿司職人になることを目指し、3年の修行を経て、池袋で開業していた先代の店に入り、その後池袋本町によい場所を見つけて開店しました。内装はすべて先代と富岡さんの手作り。竹や銘木を使った内装工事には4か月もかかったそうです。

開店当時は商店街もにぎやかで、すぐにたくさんのお客さんに来ていただき、休む間もないほどに。子供が小さい時には近所の方が預かってくれたこともあるなど、町の人にはずいぶんと助けていただいたそうです。昔に比べて人通りも少なくなり、周りのお店がどんどんなくなっていく中、お客さんに恵まれ、今日までやってきたとのこと。

お店のもっとうは「本物の旨いお寿司」。ちゃんとした素材を手を抜かずにお客さんに提供し、満足していただけることに日々取り組んでいます。寿司のネタ選びはもちろんのこと、料理方法にも創意工夫をこらしています。お寿司の握り方もお客さんに合わせて変えているそうです。

最近では立ち食い寿司デーでお寿司を気軽に楽しんでいただいたり、奥さんが中心になって寿司ネタでつくる天井の日(毎週火曜日)をやるなど、地域の人に親しんでいただける工夫にも余念がありません。元気のいいお話を聞いているうちに時間はあっという間に過ぎていました。



池袋本町

まちづくりニュース

No.63

2017年9月発行

発行：池袋本町新しいまちづくりの会
http://池袋本町.net
豊島区都市整備部地域まちづくり課
問い合わせ先：
tel 03-3981-1464
fax 03-3980-5135
編集協力：防災アンド都市づくり計画室

今年のふれあいまつり

毎年恒例のふれあいまつりに、今年も新しいまちづくりの会でブースを出します。

今年は新しい企画として「池袋本町遊び場マップ」づくりを行います。昔の遊び場と今の遊び場がどう変わってきたか。そこではどんな遊びが行われてきたかを、参加者の皆さんにお聞きしたいと思います。ぜひ、ブースにお立ち寄りください。

連携校のグラウンドが完成

池袋本町小中連携校のグラウンドが完成しました。これは池袋中学校の敷地全体を土のグラウンドとして整備したものです。面積は10490㎡あり、100mの直線レーンが取れ、野球やサッカーにも十分な広さがあります。防災施設として、各方向から入れる避難門や防災資器材格納庫、防火水槽、かまどベンチが整備されています。平成10年度に整備した防災井戸も残されました。



池袋本町ふれあいまつり

日時：平成29年10月8日(日)～9日(祝)

会場：池袋本町公園



バリアフリー体験 今年の体験パトロール(6月10日)

まちづくりの会の清掃点検パトロールを、今年も地区内のバリアフリーがどの程度実現しているか、高齢者の体験ができるキットや車いすを使って点検しました。体験キットを付けると、何とか歩くことはできますが、体の自由は制限され、視界が狭く、歩くだけでもこんなに大変なのかと思わされます。

少しの段差でつまずきそうになり、視界が悪いので道路を横断するのも大変です。車道と歩道の境界部分に段差や障害物があるのかもよく注意しないとわかりません。また、車いすで通行すると、道路のほんのわずかの勾配でまっすぐ進むことができません。

ふだんは何気なく歩いている道でも、まちの中にはバリアフリーがたくさんあることを体験できました。



まごころのバリアフリー

新しいまちづくりの会でバリアフリー体験を行ったので、上池袋にある地域活動支援センター「麦の家」の磯崎さんにお話を伺いました。

「麦の家」は、主に知的障がいを持っている人が通う施設です。社会の中で生活する力をつけていくための作業指導、生活指導を行っています。彼らは一般の人々と同じようにはできないことが多いのですが、一定の作業を行うことはできます。ゆっくり教えることによっていろいろなことができるようになります。むしろ健常者よりも集中力が高い場合が多く、そして得意なことを覚えるのは早いそうです。区役所4階にある「カフェふれあい」には、区内の障がい者の皆さんが作った作品が展示してあります。どれもすばらしい出来栄のものばかり。「カフェふれあい」には障がいを持った人も働いています。

健常者は、自分とは違うということで障がい者を排除したり、偏見を持ったり、過剰に同情したりしがちです。しかし、それは障がいを持った人とふれあったことがない、どう対処すればよいかわからないということが原因ではないでしょうか。

町に出て、いろいろな活動を始めるようになった彼らには、自分とは違うという目で見られることが心のバリアーになっています。まず家族が心のバリアーを取り去り、近所の人、町の人と一緒にわかるようにすることによって、障がい者と健常者のふれあいができるようになることが大切で、学校生活での友達どうしのかかわりも心のバリアーを取るのに大切だと磯崎さんはおっしゃいます。

昔は障がいのあることを隠して生活することが多かったのですが、最近ではオープンにする家族が増えてきたそうです。障がい者に対する社会のシステムも格段によくなったそうです。だからこそ、心のバリアフリーが必要なのではないのでしょうか。(静)

つれづれに一言

池袋本町一丁目在住 大畑嘉子

池袋本町に小中連携校が誕生して一年。新しい風景の中に子ども達の賑やかな声が響きます。隣には特養の養浩荘が建築中で、まちがどんどん変わっていくのを実感します。

この夏の前半の猛暑の中、地域の小中学生とキャンプをしました。キャンプ中に見える子ども達の姿は毎年違うのですが、今年もびっくりさせられたことがたくさんありました。その中のひとつ、調理時にビンの蓋を開けられないので、握って回せない、つまり握る力が弱く弱っているのです。考えてみますと、子ども達が日常使っている水道は押すだけで水が出る形から、手を出すと水が出るに変わっているのです。私の職場も誰にでも優しい施設という考えで、トイレに入る時から何もなくても電気が点き、終わったら流れ、手を出すと水が出て、立ち去ると全てオフになります。子どもが自分で考えて行動しなくても大丈夫なのです。そんな生活をしているからでしょうか、キャンプ場のセメントカマドの上を火が燻っているのに平気で歩いたりもします。クツが溶けてしまいます。

住んでいる身近な環境の中で、人間としての能力を獲得していけないことは、大変困ったことだと思えます。幼い頃の全身運動が、心や脳を育てていくのです。道路にあつた、ちよこつとしたでこぼの上で遊び歩きバランス感覚を身に付けていたのです。いろいろな視点を持つてまちをつくらなくてはと思います。